

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発・実施支援事業報告書

プログラム名	中堅教諭等資質向上研修の前期・後期を通じた育成指標に基づく体系的プログラム—教職大学院の実践的プログラムと修了生の実践研究経験を生かして—
プログラムの特徴	青森県の中堅教諭等資質向上研修の前期は、育成指標の形成期から向上・発展期への移行期、後期は、向上・発展期の後半でミドルリーダーとしての力量を開花させる時期にあたる。弘前大学教職大学院は、県教育委員会と連携し、選択講座として、育成指標に基づき体系化された前期用プログラムと後期用プログラムを開発・実施した。前期・後期いずれも、教職大学院において現職院生の教育に効果のあった実践的プログラムと、教職大学院修了生の勤務校における実践研究の内容及び経験を生かしたプログラムとなっている。前期は、管理職や同僚の聞き取りを含む勤務校の質的調査、後期は、勤務校の改善に資する実践プランの策定と実施を、教職大学院教員の助言のもとに行うことを、プログラムの中核に置いている。両プログラムは合わせて大学院の2単位分に相当する。

令和 3年 3月

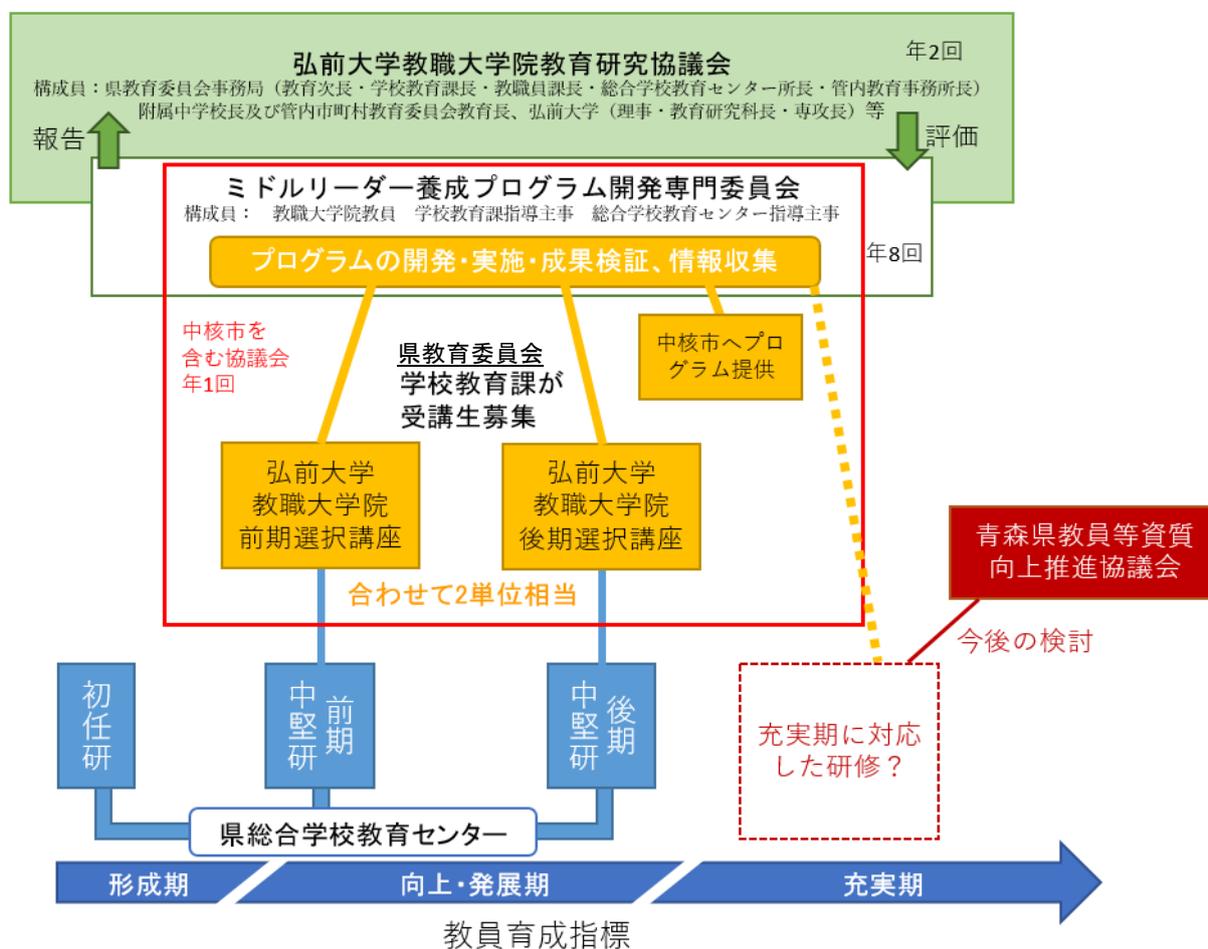
機関名 弘前大学 連携先 青森県教育委員会

プログラムの全体概要

1 青森県の教員育成指標と本プログラムの関係とそれを支える組織体制

本プログラムは、「弘前大学教職大学院教育研究協議会」の下部組織「ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会」が主体となって開発する。同専門委員会は常設のワーキンググループであり、県教育委員会指導主事と教職大学院教員によって構成される。

本プログラムは、育成指標の向上・発展期の入り口に立った中堅教諭等資質向上研修の前期選択講座、向上・発展期の後半にあたる中堅教諭等資質向上研修の後期選択講座で構成される。いずれも県教育委員会が実施する中堅教諭等資質向上研修の代替講座として実施され、募集は県教育委員会学校教育課が担った。成果については、「弘前大学教職大学院教育研究協議会」のみならず、ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会が呼びかけて中核市教育委員会や校長会にも参加してもらう「育成指標に対応したミドルリーダー世代の研修を考える協議会」等においても共有し、県全体の教員の資質向上に向けての試みとして周知していく。



2 プログラムの特徴

前期と後期を合わせて2単位に相当する体系的なプログラムである。いずれにおいても、本教職大学院において現職院生の教育に効果のあった実践的プログラムと、本教職大学院修了生の勤務校における実践研究経験を生かしたものである。前期には、勤務校の課題について管理職や同僚の聞き取りを含む質的調査を、後期には、勤務校の改善に資する実践プランの策定と実施を、教職大学院教員の助言のもとに行うことをプログラムの中核とした。それぞれの内容は、表1、表2のとおりである。

表1 中堅研（前期）足元を見つめて新たな実践をつくり出す！協働ワークショップ

1日目 8月7日（金）		2日目 9月23日（水）	
9:15	受付	9:15	受付
9:30	アイスブレイク・自己紹介	9:30	発表 観察・インタビューから見えてきたこと 発表・質疑応答・コメント
9:50	講義 講座のねらいと構成について ～指標を読み解く～形成期から向上・発展期へ～		
10:30	プレゼンテーション1 ～教職大学院修了生Aさんの実践研究～ コメントシートに記入・提出	10:30	プレゼンテーション2 ～教職大学院修了生Bさんの実践研究～ コメントシートに記入・提出
11:10	ワークショップ1 修了生Aさんの実践研究の背景にあるもの ～組織の中で新たな実践を目指すということ～ 質疑応答・討議・修了生のライフライン提示	11:10	ワークショップ4 修了生Bさんの実践研究の背景にあるもの ～組織の中で新たな実践を目指すということ～ 質疑応答・討議・修了生のライフライン提示
12:20	休憩	12:20	休憩
13:10	ワークショップ2 自分の実践と勤務校をみつめる ～気になること、変わったらいいなと思うこと～ 作成と協議	13:10	ワークショップ5 勤務校で、新たな実践をつくり出すために… ～小さなプランを立ててみよう～ 作成と協議
13:50	講義 質的データ収集の方法を知る ～観察・資料収集・インタビュー～	14:30	講義 専門職としての省察のために
14:20	ワークショップ3 勤務校を深く知るために ～観察・インタビュー等の計画を立てる～ 作成とアドバイス	15:00	ワークショップ7 教職コアリフレクション
15:35	終了	16:00	まとめと振り返り これまでの5年・これからの5年
		16:20	終了

表2 学校を活性化する実践をつくり出す！協働ワークショップ

1日目 9月28日（月）		2日目 12月24日（木）	
9:15	受付	9:15	受付
9:30	アイスブレイク・自己紹介	9:30	発表 実践プランを進めてみて… 成果と課題 発表・質疑応答・コメント
9:50	講義 講座のねらいと構成について ～指標を読み解く～ミドルリーダーとして～		
10:30	ワークショップ1 教職ライフラインを語り合おう ～省察とキャリア形成～ 作成と発表	10:50	ワークショップ5 よりよい実践に向けての省察 協議
11:50	プレゼンテーション1 ～教職大学院修了生Cさんの実践研究～ コメントシートに記入・提出	11:50	プレゼンテーション2 ～教職大学院修了生Dさんの実践研究～ コメントシートに記入・提出
12:30	休憩	12:30	休憩
13:20	ワークショップ2 修了生Cさんの実践研究の背景にあるもの ～組織の中で新たな実践を目指すということ～ 質疑応答・討議・修了生のライフライン提示	13:20	ワークショップ6 修了生Dさんの実践研究の背景にあるもの ～組織の中で新たな実践を目指すということ～ 質疑応答・討議・修了生のライフライン提示
14:20	ワークショップ3 勤務校の課題と資源の分析 作成と協議	14:20	講義 何のための学校改善か？ "START WITH WHY."
15:20	ワークショップ4 勤務校を活性化するための実践プランを立てよう！ ～プランの作成またはブラッシュアップ～ 作成と協議	15:00	まとめと振り返り 学校を活性化させるミドルリーダーとして
16:00	実践をめぐる応答 教職大学院教員からのアドバイス	15:35	終了
16:20	終了		

1 開発の目的・方法・組織

① 開発の目的

青森県教育委員会の実施する中堅教諭等資質向上研修の代替となる選択講座として、青森県の教員育成指標に対応した体系的な現職教員研修プログラムを開発することを目的とする。弘前大学教職大学院のミドルリーダー養成コースで現職院生にとって効果的だったプログラムを活かし、また、教職大学院修了生の実践研究の発表を含むことにより、教職大学院の教育研究成果を、広く現場に還元することも意図している。

② 開発の方法

県教育委員会指導主事（学校教育課、総合学校教育センター所属）と本教職大学院教員がメンバーとなる「ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会」において協議しながら、プログラム開発を行う。すでに前年度、中堅教諭等資質向上研修の前期については実施したため、その成果を検証しつつ、新たに実施する後期の研修には、向上・発展期後半のキャリアステージに合った内容を組み込み、体系的なプログラムとして構成していく。なお、教職大学院の現職教員院生は中堅教諭等資質向上研修後期の年代にあたるため、当事者の視点を生かして、研修実施後の省察を協働的に深めることを目的として、受講者として参加してもらった。

③ 開発組織

本教職大学院は、青森県教育委員会や市町村教育委員会をはじめとする関係機関との連携組織として、弘前大学教職大学院教育研究協議会を設置している。本プログラムの開発を担うのは、その下部組織として位置付けられている「ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会」である。この専門委員会は、県教育委員会指導主事（学校教育課、総合学校教育センター所属）と本教職大学院教員で構成され、これまでも中堅教諭等資質向上研修をはじめとするさまざまな現職教員のための研修プログラム開発を担うとともに、中核市教育委員会関係者も加えた「育成指標に対応したミドルリーダー世代の研修を考える協議会」を開催するなど、青森県内における現職教員研修について、考える重要な場の一つとなっている。

2 開発の実際とその成果

① 中堅教諭等資質向上研修前期代替講座

○研修の背景やねらい

青森県の育成指標において、形成期から向上・発展期に移行したばかりの時期の教員に適した研修プログラムを開発する。向上・発展期に入った教員は、自らの担当する学級や授業等のみに視点が限定されていることが多い形成期から、学年・分掌や学校組織を意識して行動し、後輩教員の相談に乗ったり指導したりすることが期待される。そうした自覚を持たせ、視野を広げ、組織的に学校のことを考える契機となるプログラムを目指した。2日間のプログラムであるが、間を3週間程度取ることにより、1日目の研修内容を踏まえて、勤務校で管理職や同僚から、本人が学校課題についての意見等を聞き取り、2日目に報告させるようにした。令和元年度の実施を踏まえて、一部の内容を精選し、よりじっくりと考えながら取り組めるように構成した。

○対象、人数、期間、会場、日程講師

・対象

青森県教育委員会の中堅教諭等資質向上研修の前期受講者のうち、希望する者

・人数

9名

・会場

弘前大学教育学部 302 教室

・日程

第1日 令和2年8月7日（金）9：30～15：35

第2日 令和2年9月28日（月）9：30～16：20

・講師

- 福島 裕敏（弘前大学大学院教育学研究科長・教授）
- 中野 博之（弘前大学教職大学院専攻長・教授）
- 天坂 文隆（弘前大学教職大学院教授）
- 菊地 一文（弘前大学教職大学院教授）
- 大瀬 幸治（弘前大学教職大学院准教授）
- 吉原 寛（弘前大学教職大学院准教授）
- 吉田 美穂（弘前大学教職大学院准教授）
- 工藤 由紀（七戸町立天間林中学校教諭・教職大学院第2期修了生）
- 下村 亘（八戸市立旭ヶ丘小学校教諭・教職大学院第2期修了生）

・ファシリテーター

弘前大学教職大学院ミドルリーダー養成コース院生、各日4名

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

本プログラムの中心的な構成要素は、第1日に、本人が感じている勤務校の課題を明らかにし、第2日までの間に、果たしてその認識は妥当か、管理職や同僚はどう捉えているのかを質的に調査させ、第2日にそれを報告することを通して、組織としての学校を意識させる内容であり、第1日後半から第2日前半に配置する。また、勤務校の課題を見つめて行われた実践研究事例として、教職大学院修了生の実践研究とそのベースにある教職キャリアを聞く機会を2日ともに置く。

講座の冒頭には、育成指標に基づく省察によって、自らのこれまでの実践と教員生活を振り返り、広い視野で教職について考えられるベースをつくり、講座の最後には、教職コアリフレクションを置いて、教職に就いて働く際の核となる自身の資質や、大切にしたいと考える使命などについて改めて深く考えさせる。

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
育成指標を読み解く一形成期から向上・発展期へ	1時間	自分自身の実践や教師としての在り方を省察し、キャリアステージの移行を意識するとともに、自らの課題を自覚する	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 自己紹介のあと、教員になってよかったと思ったことのシェアをする。その後、教員育成指標ワークシート（形成期と向上・発展期版）をもとに自らの実践を省察する。 ・実施形態 グループワーク→個人作業→グループワーク ・使用教材 青森県教員育成指標シート、省察シート ・進め方の留意事項 リラックスしながら自らのこれまでの教師としての軌跡を振り返ることができる雰囲気をつくる。
教職大学院修了生の実践研究発表	40分	勤務校の課題をみつめ、自らが取り組める実践を考	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 教職大学院2年次に行った勤務校での実践研究を修了生が発表する。 ・実施形態 講義

		え、周囲と協働的に取り組む大切さを知る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 使用教材 講師の実践研究報告書、スライド ・ 進め方の留意事項 教職大学院生ではあるが、通常の勤務をしながら勤務校の課題に向き合って行った実践である点で、と同じ立場にしながら進めた取組であることを伝える。最後に各自コメントシートを書く。
教職大学院修了生を囲んでの座談会	1時間 10分	若手教員が現場で新しい実践に取り組む際に注意すべき点や同僚との協働の実際について考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 受講者のコメントシートを踏まえた質問に、修了生が応答する。途中で、修了生が自身の教職ライフラインを示し、自らの教職キャリアの曲折を語る。それも踏まえて、さらに意見交換・交流を進める。 ・ 実施形態 座談会 ・ 使用教材 講師の教職ライフライン(映写のみ) ・ 進め方の留意事項 率直に応答し合えるようにする。
(昼休憩)	50分		
自分の実践と勤務校を見つめる一気になること、変わったらいいなと思うこと	40分	自らの実践現場にある課題に気づき、考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 自分の実践と勤務校の状況をみつめ、「気になること、変わったらいいなと思うこと」を付箋に書き出し、グループで、お互いの考えを伝え合いながら、出てきた付箋をKJ法で整理する。その過程で、こんなことならできるのではないかという、アドバイスもし合う。グループで出た意見を発表する。 ・ 実施形態 個人作業→グループワーク ・ 使用教材 特になし ・ 進め方の留意事項 学校ごとに異なる状況や課題があつて当然なので、ここでは、意見を集約するというよりも、いろいろな見方があることを知り、自らの課題意識を広げ深めるための作業であることを強調する。
質的データ収集と実践研究	30分	質的データの収集の方法を知る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 社会学を踏まえた観察・資料収集・インタビューなどの質的調査の方法を説明する。 ・ 実施形態 講義 ・ 使用教材 講師作成資料 ・ 進め方の留意事項 「気になること、変わったらいいなと思うこと」

			を具体的な実践にしていくためには、勤務校の状況を、一度立ち止まって知る必要があること、そのための調査であることを強調する。
勤務校の質的調査の立案	30分	自らの課題意識を検証し、視野を広げられる調査計画を立てる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 質的調査計画書を配布し、作成させる。インタビューでは、受講者が課題だと感じたことについて、管理職や同僚が、どのような見方をしているのか、どうしたらいいと思うのかを聞いてくるよう促す。 ・ 実施形態 個人作業。ただし、必要に応じて講師や院生が助言したり、グループでシェアする。 ・ 進め方の留意事項 質的調査報告書を配布し、第2日の前日までに、メールで提出するよう伝える。 当日配布した資料やワークシートは、全て配布のファイルに順番に綴じ、次回も持参するよう伝える。 第1日終了。
第2日へ			
勤務校の質的調査報告	1時間	調査結果を共有し、教職大学院教員より助言を得ることで、組織としての学校について深く考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 全員の調査報告書を綴じた冊子を配布し、それに基づいて、全員が順に自分の調査結果とそこから気づいたことを報告する。一人の発表ごとに、報告者の校種やテーマに応じて、教職大学院の教員がコメントを述べる。 ・ 実施形態 の発表と教職大学院教員によるコメント ・ 使用教材 調査報告書（受講者の報告書をまとめたもの） ・ 進め方の留意事項 一人一人の報告を、丁寧に受け止め、他の受講者にとっても意味を持つよう、価値づけたり一般化したりするコメントを伝える。
教職大学院修了生の実践研究発表	40分	勤務校の課題をみつめ、自らにできる実践を考え、周囲と協働的に取り組む大切さを知る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 教職大学院2年次に行った勤務校での実践研究を修了生が発表する。 ・ 実施形態 講義 ・ 使用教材 講師の実践研究報告書、スライド ・ 進め方の留意事項 教職大学院生ではあるが、通常の勤務をしながら勤務校の課題に向き合って行った実践である点で、受講者と同じ立場にいながら進めた取組であることを伝える。最後に各自コメントシートを書く。

教職大学院修了生を囲んでの座談会	1時間 10分	若手教員が現場で新しい実践に取り組む際に注意すべき点や同僚との協働の実際について考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 受講者のコメントシートを踏まえた質問に、修了生が応答する。途中で、修了生が自身の教職ライフラインを示し、自らの教職キャリアの曲折を語る。それも踏まえて、さらに意見交換・交流を進める。 ・ 実施形態 座談会 ・ 使用教材 講師の教職ライフライン(映写のみ) ・ 進め方の留意事項 率直に応答し合えるようにする。
(昼休憩)	50分		
勤務校で新たな実践をつくり出すために一小さなプランを立ててみよう	40分	主体的に自分が実践できることを考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 個々人で、実践プラン作成シートに、プランを記入してみる。学年・分掌単位などで実現できそうなものや、自分がぜひやってみたいものを自由に考えてみる。グループで共有し意見交換する。 ・ 実施形態 個人作業→グループでシェア、助言し合う。 →全体発表 ・ 進め方の留意事項 ワークシートを埋めていく中で、アイデアがプランへと成長することを示唆する。特に、「中心になって動くのは…」という欄に、必ず自分が含まれるように示唆する(他人事にしない)。プランは、複数あってよい。その場合は、ワークシートを追加してもらう。
専門職としての省察のために	30分	自らの教職を支えるものについて、学術的な視点から理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 教師教育学の知見を踏まえて、反省的実践家としての専門職の在り方、省察の意義について説明する。 ・ 実施形態 講義 ・ 進め方の留意事項 次のワークの土台となる概念を押さえる。
教職コアリフレクション	1時間	自らの教職を支えるコアについて、改めて省察する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 教職コアリフレクションのワークシートに、自らの教職を支える「中核的資質」「使命」等を記入していく。それぞれの気づきをグループで共有する。最後に、講師が「葛藤の乗り越えを支えるコアリフレクション」について解説し、教育実践のもつ目的＝価値性の意識化と自らの強みの大切さを伝える。 ・ 実施形態 個人作業→グループワーク ・ 使用教材

			教職コアリフレクションワークシート ・進め方の留意事項 受講者が「中核的資質」「使命」等に気付けるよう、必要に応じて講師やファシリテーターが助言する。
まとめと振り返り	20分	2日間にわたる研修を振り返り、自らの変容を自覚させる	・内容 自分の研修ファイルに入っている1日目に作成した育成指標ワークシートや省察シートを見て、自分が2週間どう変わったのかを、振り返りながら、ワークシートに記入する。さらに、向上・発展期を生きる今後5年間で、自分が取り組みたいことを記入する。 ・実施形態 個人作業 ・教材 まとめと振り返りワークシート ・進め方の留意事項 講師の方から、1日目にしたワークや出てきた話題等を話すなどして、振り返りを助ける。 終了。

※前期講座については、昨年度にベースとなるプログラム開発を行っており、今年度は構成内容の精選・時間配分の調整等を行った。このため、使用したワークシート類は昨年度と同様であり、昨年度報告書の添付資料を参照のこと。

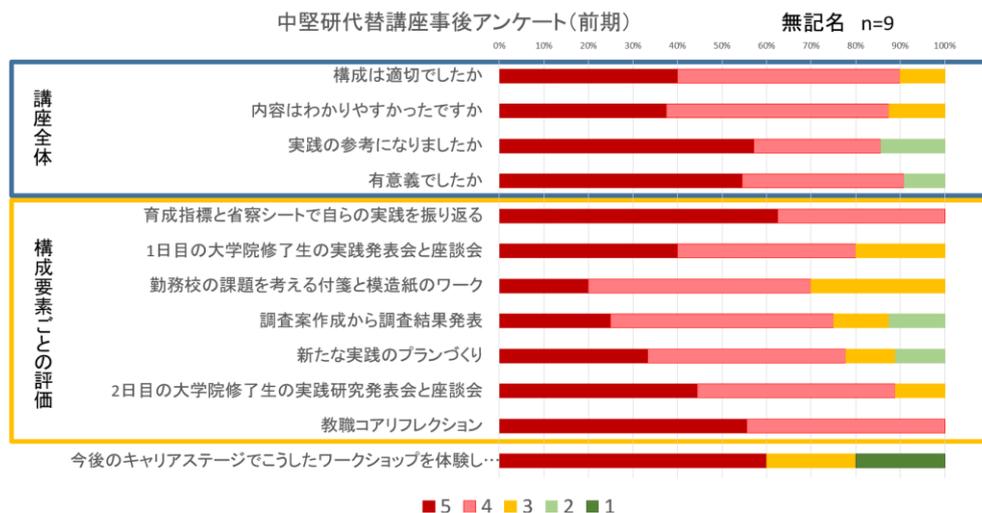
○実施上の留意事項

県内でも遠方からの参加者が少ないため、移動時間等を考えて、月曜日や金曜日、祝日の前の日や後の日に設定する。

教職大学院修了生講師については、中堅研前期の年齢に近い若手の修了生とする。

○研修の評価方法、評価結果

2日間の講座修了時に、無記名のアンケートを実施した。回収率は100%である。



講座全体について、「構成」「内容のわかりやすさ」「実践の参考になるか」「有意義か」という観点から問う項目と、講座の構成要素ごとの評価を尋ねるものであった。

講座の構成要素ごとの評価から、「育成指標や省察シートから自らを振り返る」「教職コアリフレクション」など、自らの実践やそれを支えるものについて改めて見つめ直すワークの評価が高いことがわかる。一方、昨年度と比べても、勤務校の課題を考えたり、自ら勤務校の状況を調査したりするワークの評価はあまり高くない。その背景にあるものについて、「ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会」で検討したところ、受講者の経験年数という要因が指摘された。中堅教諭等資質向上研修は法定研修であるため、正規採用になってからの年数で受講が決まる。年度によっては、比較的長い講師時代を経てから正採用になった人が受講する割合が高いこともあるが、大学卒業後すぐに採用となった受講者が大半を占めることもある。今年度は、比較的経験年数が浅い受講者が大半を占めた。このため、まだ自分自身の実践を離れた学校課題などには目が向きにくい傾向が強かったものと思われる。

近年の青森県の採用動向を見ると、採用される年齢は若くなりつつある。この点を踏まえて、来年度以降は、今回、前期で行ったプログラムは後期に移し、中堅教諭等資質向上研修前期の代替講座には、「授業づくりを捉え直す！協働ワークショップ」という新たな内容を入れることとした。

○研修実施上の課題

県教育委員会の中堅教諭等資質向上研修の代替講座としての実施は2年目となり、連携は深まってきている。今後はより多くの受講者に選択してもらえるよう、より積極的な周知の在り方を検討していきたい。

② 中堅教諭等資質向上研修後期代替講座

○研修の背景やねらい

青森県の育成指標において、向上・発展期の後半に位置し充実期に近づこうとしている時期の教員に適した研修プログラムを開発する。前期からの接続を意識するとともに、より学校課題の解決に意識的に取り組むことをねらいとして、第1日に勤務校の学校改善プランを策定し第2日に報告することを中心にした実践的な内容とした。令和元年度に行った前期の試行プログラムから、後期での実施がより適していると考えられる教職ライフラインのワークを移す他、平成30年度・令和元年度に教職大学院が県のミドルリーダー研修講座用に開発した“START WITH WHY”のプログラムを組み込み、実践の根底にある価値について深く省察させた。

○対象、人数、期間、会場、日程講師

・対象

青森県教育委員会の中堅教諭等資質向上研修の後期受講者のうち、希望する者

・人数

4名。ただし、教職大学院の現職教員院生8名も受講者として参加。12名で実施。

・会場

弘前大学教職大学院演習室

・日程

令和2年9月28日(月) 9:30~16:20

令和2年12月24日(木) 9:30~15:35

・講師

中野 博之 (弘前大学教職大学院専攻長・教授)

天坂 文隆 (弘前大学教職大学院教授)

菊地 一文 (弘前大学教職大学院教授)

大瀬 幸治 (弘前大学教職大学院准教授)

吉原 寛 (弘前大学教職大学院准教授)

吉田 美穂（弘前大学教職大学院准教授）

小泉 朋子（青森県立八戸第一養護学校教諭・本学教職大学院第1期修了生）

稲葉 友輝（青森市立浪岡小学校教諭・本学教職大学院第2期修了生）

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

本プログラムの中心的な構成要素は、第1日に自らの勤務校の課題をみつけ、それを改善するAction Planを策定し、第2日までの間に実践して、第2日にはそれを省察しさらに深めていく内容であり、第1日後半から第2日前半に配置する。また、勤務校の課題を見つめて行われた実践研究事例として、教職大学院修了生の実践研究とそのベースにある教職キャリアを聞く機会を2日ともに置いた。

講座の冒頭には、育成指標及び教職ライフラインによって、自らのこれまでの実践と教員生活を振り返り、広い視野で教職に就いて考えられるベースをつくり、講座の最後には、「なぜその仕事に取り組むのか」「周囲にどう説明し巻き込むのか」といった実践の根底にあるものを考えさせることでミドルリーダーとしての自覚を高める構成としている。

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
育成指標を読み解く—ミドルリーダーとして	1時間	自分自身の実践や勤務校の課題を振り返り、充実期への移行を目前にしたミドルリーダーとしての意識を持つ	<ul style="list-style-type: none">・内容 自己紹介でリラックスした状況を作った後、育成指標を説明、育成指標ワークシートと省察シートで自らの実践を振り返り、グループワークでシェアする。その上で、ミドルリーダーとして感じる学校課題や改善ポイントについて、グループでKJ法を使って考える。・実施形態 個人作業→グループ作業・使用教材 育成指標ワークシート（向上・発展期／充実期版）・進め方の留意事項 受講者がミドルリーダーとしての意識を持ち、互いに支え合うような雰囲気醸成する。
教職ライフラインを語り合おう	1時間 20分	これまでの自らの教職生活について、その時々どのような環境や周囲との関係の中で、何を感じ考えながら過ごしてきたかを省察	<ul style="list-style-type: none">・内容 省察が過去・現在・未来をつなぐものであること、教職ライフライン作成の意味と方法について、説明した上で、教職ライフラインを作成させる。次にグループ内で発表し合い、転機における自らの学習・研修、周りの支えに関する共通点を中心に協議する。各グループの発表後に、講師から、中堅期の課題や、乗り越える際にポイントになる職場の同僚関係などの要因について伝える。・実施形態 個人作業→グループワーク・使用教材

		し、自らの教職を支えるものや働くにあたっての周囲との関係を考える	<p>教職ライフラインワークシート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進め方の留意事項 今の自分にとっての大きな転機となった時期の学校の状況や、自らの学習・研修、周囲の支えについて考えてもらう。教職ライフラインは、教員になってからではなく、教職を意識したところからのライフラインとし、じっくり自らの歩みを振り返らせることを意識させる。グループ内での発表に際しては、傾聴を基本とし、相手の省察を促すような質問・応答を心掛けるよう伝える。
教職大学院修了生の実践研究発表	40分	勤務校の課題をみつめ、自らが取り組める実践を考え、周囲と協働的に取り組む大切さを知る	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 教職大学院 2 年次に行った勤務校での実践研究を修了生が発表する。 ・実施形態 講義 ・使用教材 講師の実践研究報告書、スライド ・進め方の留意事項 教職大学院生ではあるが、通常の勤務をしながら勤務校の課題に向き合っていた実践である点で、受講者と同じ立場にしながら進めた取組であることを伝える。最後に各自コメントシートを書く。
(昼休憩)	50分		
教職大学院修了生を囲んでの座談会	1時間 10分	若手教員が現場で新しい実践に取り組む際に注意すべき点や同僚との協働の実際について考える	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 受講者のコメントシートを踏まえた質問に、修了生が応答する。途中で、修了生が自身の教職ライフラインを示し、自らの教職キャリアの曲折を語る。それも踏まえて、さらに意見交換・交流を進める。 ・実施形態 座談会 ・使用教材 講師の教職ライフライン(映写のみ) ・進め方の留意事項 率直に応答し合えるようにする。
勤務校の資源の分析	1時間	勤務校の資源を俯瞰的にとらえ、自校の課題と関連付けて考えることができるようになる	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 SWOT 分析について説明を受けたのち、受講者が各自で、校種別の例などを参照しながら自校の SWOT 分析を行う。 ・実施形態 個人作業 ・使用教材 SWOT 分析の様式と校種別の記入例 ・進め方の留意事項 作業が進みにくい受講者には、教職大学院教員が声をかけ、取組を支援する。SWOT の入力順や領域によ

			る分量の偏りなどから、受講者の関心や意識が見えるケースもあるので、そうした認知も促す。
勤務校を活性化する実践プランを立てよう	40分	課題分析やSWOT分析を踏まえて、経営に参画するミドルリーダーの一員として、勤務校の改善に向けたプランを策定できるようにする	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 午前中に行った勤務校の課題分析とSWOT分析の結果を見ながら、改めて勤務校について考え改善に向けて、それぞれがAction Planを作成する。完成後、グループで説明し、相互にアドバイスをする。 ・実施形態 個人作業→グループワーク ・使用教材 Action Plan ワークシート ・進め方の留意事項 Action Planは、本人にとって実践可能な校内分掌・学年・教科・学級等での取組を考えさせる。
実践をめぐる応答	20分	Action Plan 実行に向けて意欲を高め、具体的なイメージを持てるようにする	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 グループからの発表を受け、受講者が作成したAction Planに対し、教職大学院教員がコメントし、実行に移す際に留意するポイントを解説する。 ・実施形態 グループ発表とそれに対するコメント ・使用教材 Action Plan の取組の実際と結果ワークシート ・進め方の留意事項 受講者が第2日までに、実際に勤務校でAction Planに取り組む意欲を高めるとともに、不安に思っている点などを解消できるようにする。第2日の前に、完成したSWOT分析と、「Action Plan の取組の実際と結果ワークシート」を記入して、メールで事前提出するよう伝える。第1日終了
第2日へ			
Action Planを進めてみて一成果と課題	1時間30分	Action Planに取り組んで結果を共有し、教職大学院教員より助言を得ることで、組織を動かす実践に必要な者について深く考える	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 受講者が作成した「Action Plan の取組の実際と結果ワークシート」をもとに、各自の取組を発表し、一人一人について教職大学院教員がコメントする。 ・実施形態 個人発表と教職大学院教員によるコメント ・使用教材 受講者が記入した「SWOT分析シート」と「Action Plan の取組の実際と結果ワークシート」を、全員分まとめて掲載した冊子 ・進め方の留意事項 一人一人の報告を、丁寧に受け止め、他の受講者にとっても意味を持つよう、価値づけたり一般化したりするコメントを伝える。

よりよい実践に向けての省察	40分	自らの実践を振り返り、組織の中で新たな取組をする上で留意すべきこと、工夫できる点等に気づく	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 グループで、お互いの発表についての疑問点を質問したり、もう少しこうしたらよいのではないかとと思われる点をアドバイスし合ったりする。グループで「組織において新たな取組を進める上で大切なポイント」を話し合い、全体に発表。 ・ 実施形態 グループワークと発表 ・ 使用教材 特になし ・ 進め方の留意事項 受講者が話しやすいグループ編成とする(テーマ、校種等への配慮)。
教職大学院修了生の実践研究発表	40分	勤務校の課題をみつめ、自らが取り組める実践を考え、周囲と協働的に取り組む大切さを知る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 教職大学院 2 年次に行った勤務校での実践研究を修了生が発表する。 ・ 実施形態 講義 ・ 使用教材 講師の実践研究報告書、スライド ・ 進め方の留意事項 教職大学院生ではあるが、通常の勤務をしながら勤務校の課題に向き合っていた実践である点で、受講者と同じ立場にしながら進めた取組であることを伝える。最後に各自コメントシートを書く。
教職大学院修了生を囲んでの座談会	1 時間 10 分	若手教員が現場で新しい実践に取り組む際に注意すべき点や同僚との協働の実際について考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 受講者のコメントシートを踏まえた質問に、修了生が応答する。途中で、修了生が自身の教職ライフラインを示し、自らの教職キャリアの曲折を語る。それも踏まえて、さらに意見交換・交流を進める。 ・ 実施形態 座談会 ・ 使用教材 講師の教職ライフライン(映写のみ) ・ 進め方の留意事項 率直に応答し合えるようにする。
何のための学校改善か? “START WITH WHY.”	40分	「なぜ」を問うことを通して、仕事において周囲の人を巻き込みリーダーシップを発揮する在り方を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容 「How great leaders inspire action」(サイモン・シネック 2010 TED 17分)を視聴した上で、学校という枠を超えた広い視野のもとに「何が人を動かすのか」という視点からリーダーシップについて考える。その上で、「なぜその仕事に取り組むのか」「周囲にどう説明し巻き込むのか」、具体的な学校の実践例を取り上げた講義を行う。 ・ 実施形態 動画視聴と講義

			<ul style="list-style-type: none"> ・使用教材 「How great leaders inspire action」 (サイモン・シネック 2010 TED 17分) ・進め方の留意事項 2日間の最後のコンテンツとなるので、第1日からの受講者の学びを講義の中で意識してつなげるようにする。
まとめと振り返り—学校を活性化させるミドルリーダーとして	35分	2日間にわたる研修を振り返り、自らの変容を自覚させる	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 自分の研修ファイルに入っている第1日に作成した育成指標ワークシートや省察シートを見て、自分が2週間でどう変わったのかを、振り返りながら、ワークシートに記入する。さらに、充実期に入っていく今後5年間で、ミドルリーダーとして自分が取り組みたいことを記入する。 ・実施形態 個人作業 ・教材 まとめと振り返りワークシート ・進め方の留意事項 講師の方から、第1日に行ったワークや出てきた話題等を話すなどして、振り返りを助ける。

※添付資料は次のとおりである。

- 添付① 育成指標ワークシート (向上・発展期／充実期版)
- 添付② 教職ライフラインのシート
- 添付③ SWOT分析シート(両面)と校種別記入例
- 添付④ Action Plan シート
- 添付⑤ Action Plan の取組の実際と成果

○実施上の留意事項

今回の受講者は、特別支援学校教諭が多かったため、修了生の講師の選定等において、校種やテーマを意識するようにした。この点については、今後もきめ細かく行う必要がある。また、教職大学院1年次生に受講者として加わってもらう場合には、教職大学院生が一般の受講者から話題を引き出し、協議を活性化させるなどの役割を積極的に果たせるよう、事前に指導するとともに、それが可能になるようなグループ編成を行う必要がある。

○研修の評価方法、評価結果

研修修了時に、無記名のアンケートを実施した。回収率は100%である。以下に示すのは、教職大学院生以外の一般の受講者4名の結果である。



自由記述は、次のとおりであった。

- ・ 自分を振り返る時間、多くの方のお話を聞くことのできる時間、研究報告を聞いたことなど、多岐にわたる内容でたくさんのお話を学ぶことができました。
- ・ 多忙な日々の中で見えなくなっていたことを、今一度立ち止まって考えるよい機会になりました。常に目的意識をもって学校のため、子供たちのためにプラス思考でがんばっていきたいです。
- ・ 2日間受講し、大変有意義な研修となりました。普段の研修と違ったかたち(場所が大学、現職の院生の方との講義)が新鮮で、多くのことを学ぶことができました。学校での実践に活かしていきたいです。
- ・ 研究テーマに沿った実践について具体的に聞くことができ、とても勉強になりました。自分の考えを分析し、次に目標とするべき内容を考える過程が思考を整理しやすく、今後の実践に活かしたいと思いました。

一般受講者が4名と少人数であるため比較分析は難しく、参考程度に見るしかないが、前期の代替講座と比べ概ね高い評価となっている。特に特徴的なのは構成要素ごとの評価で、教職大学院修了生の実践研究と座談会への評価が高い。全体としても、研修が「実践の参考になった」という項目で全員が最も高い評価を付けている。前期の受講者に比べ、10年経験者である中堅教諭等資質向上研修の後期の受講者は、日頃の業務の中で学校課題を見つめ、それを解決するための実践に意識的に取り組むといった営みが、身近なものに感じられる段階に達しているという側面があるものと考えられる。中堅教諭等資質向上研修の後期にあたる受講者にとっては、教職大学院修了生の実践研究発表が有効であると言えるだろう。

○研修実施上の課題

教職大学院1年次の現職院生を受講者とする場合、彼らは勤務校を離れた状態にあるため、Action Planを同一の条件で考えることは難しい。今年度は院生が各自工夫しながらまとめたかったが、今後は改善が必要である。来年度は、前述のとおり、前期の代替講座プログラムを大きく見直すため、来年度の後期代替講座では、今年度の前期の講座で行った勤務校での質的調査を第1日から第2日にかけて実施する予定である。この内容ならば、勤務校を離れている教職大学院生も、教職大学院で行っている勤務校実習などを活かして、一般の受講者と同様の参加が可能になる。今回のAction Planづくりの内容は、今後、充実期の研修に入れていきたい。

今年度は後期の一般受講者は、少なかった。今後はより多くの受講者に選択してもらえよう、積極的な周知の在り方を検討していきたい。

3 連携による研修についての考察

(連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等)

・連携を推進・維持するための要点

「弘前大学教職大学院教育研究協議会」の下部組織である「ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会」が、常設のワーキンググループとして実質的に機能していることが、弘前大学教職大学院と青森県教育委員会の連携を推進・維持する大きな原動力となっている。「ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会」は、県教育委員会指導主事と教職大学院教員によって構成されており、年8回の委員会においては、キャリアステージに応じた現職教員研修プログラムについて常時意見交換が行われている。そうした意見交換の上に、平成30年度には中堅教諭等資質向上研修の代替講座の枠組を活用する構想が出され、令和元年度には前期代替講座を実施、令和2年度には、体系的なプログラムとして前期・後期の代替講座を実施、とキャリアステージを意識したプログラムの開発が継続的に進められてきている。

・連携により得られる利点

キャリアステージに応じた研修体系の構築は、現在も次の段階に入りつつある。令和2年度に検討が大きく進んだのが、青森県育成指標の充実期にあたる世代の研修についてである。「ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会」は、キャリアステージに対応するプログラムがない充実期研修について具体的に検討し、青森県教育委員会主催の「青森県教委等資質向上推進委員会」、「弘前大学教職大学院教育研究協議会」等にその必要性を提起するとともに、県内関係機関（県教育委員会、中核市教育委員会、各校種の校長会等）に充実期の教員に求める資質能力とそのための望ましい研修の在り方についてヒアリングを行ってきた。結果として、学校経営への参画意欲や、学校外の関係者と連携する力等が求められていることが明らかとなり、令和3年度には、充実期プレ企画を県教育委員会と連携しながら実施する方向となっている。

・今後の課題

中堅教諭等資質向上研修の前期については、受講年齢の低下が予想されることから、新たに「授業づくり」をテーマとした内容のプログラムを開発するとともに、前期に行っていた内容を後期に、後期に行っていた内容の一部を活かしながら、新たに充実期の研修を構築することが、今後の課題である。

4 その他

[キーワード] 育成指標、ミドルリーダー、参加型、修了生実践研究発表、勤務校課題

[人数規模]

A. 10名未満 **B.** 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上

補足事項（前期は9名、後期は4名の計13名である。ただし、後期については現職教員の教職大学院生8名も受講者として参加した。これも合わせれば21名でCとなる。）

[研修日数(回数)]

A. 1日以内 **B.** 2～3日 C. 4～10日 D. 11日以上
(1回) (2～3回) (4～10回) (11回以上)

補足事項（前期2日プログラム、後期2日プログラムで計4日分の研修を実施した。

ただし、受講者はそれぞれ5年経験者と10年経験者で異なるため、受講者から見れば2日プログラムであるため、Bとした。）

【担当者連絡先】

●実施者

実施機関名	国立大学法人 弘前大学	
所在地	〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地	
連絡担当者	所属・職名	教育学部総務グループ・係長
	氏名（ふりがな）	佐藤 育世 （ さとう いくよ ）
	事務連絡等送付先	〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地 弘前大学教育学部
	TEL/FAX	TEL 0172-39-3314 FAX 0172-32-1478
	E-mail	jm3314@hirosaki-u.ac.jp

●連携機関

連携機関名	青森県教育委員会	
所在地	〒030-8540 青森県青森市新町2-3-1	
連絡担当者	所属・職名	青森県教育庁学校教育課・総括副参事
	氏名（ふりがな）	佐々木 勝規 （ ささき かつのり ）
	事務連絡等送付先	〒030-8540 青森県青森市新町2-3-1
	TEL/FAX	TEL 017-734-9895 FAX 017-734-8270
	E-mail	katsunori_sasaki2@pref.aomori